

韓国側パフォーマンス報告

第1日目のパフォーマンスは、韓国のコンテンポラリーの全てがわかる、という7題。大学に所属する舞踊団による演技である。韓国の舞踊界は学歴社会で、優秀な舞踊団のほとんどは大学の舞踊団であり、教授が指揮を取り、舞踊専攻の学生とその卒業生らで構成される。来日した出演者は全て良く訓練されており、しっかりとした踊り方をする。パフォーマンスをする機会の多さを感じさせるプロフェッショナルな演技だった。

純粋な伝統舞踊は一つもないが、共通して韓国舞踊の雰囲気を持つ。Jun Hong-Jo 舞踊団による作品は、「心に流れる川」を表現しようとするソロの現代舞踊。シンプルなドレスに素足（新体操で使用するようなシューズ着用）で踊るが、音楽は韓国のアリラン民謡を使用。Nam Jin-Hee 現代舞踊団の作品は、民族舞踊の創作の時に良く使われるという現代音楽を使用、途中から面を付けて、形式化された悲しみを表現した。衣裳は韓国のチョゴリを思わせるものだが、テクニクには、伝統的なものが強く表にでることはない。Jung Yoo-Yeong バレエ団、Hwang Kyu-ya バレエ団の作品はダンス・クラシックのテクニクを主に使用。前者の衣裳はチョゴリ型、構成はバレエ的。後者の衣裳、構成はモダンダンス的。Bea Gu-Oak 舞踊団、Kang Mi-Sum 舞踊団の作品は韓国に昔から伝わる話を題材にしたもので、衣裳、音楽、物語からそれが分かるが、振付は伝統舞踊をもとにした創作。ラストを華やかに飾った Song Soo-Nam 舞踊団の作品は、上品で華のある民族衣裳での宮中の楽しい音楽と踊り。テクニクもほとんど伝統舞踊のものであり、踊り方も純粋なものとの大きな違いは感じない。

呼吸を大切にし、軽く、速く、そして絶え間なく流れるように踊りながらも、内部から溢れ出る力強さを感じさせるのは、韓国舞踊からくる共通点だろうか。

交通手段が発達しインターネットが普及している現在でも、作者の生まれ育った土地の歴史とその作品を切り離して考えることは難しい。しかし韓国では国からの助成金の問題も関係し、民族的な作品が多くなっている。古典舞踊の保存、継承を努めたものには多くの助成がでるということである。

終演後、何人かにインタビューを行った。日本人は韓国舞踊の薫りが最も強い最後の Song Soo-

Nam 舞踊団の作品、日本在住の韓国人は Nam Jin-Hee 現代舞踊団のデュエット作品を良しとした。これは最も韓国を感じない作品であった。

ドイツのノイエ・タンツを実践レベルで普及に努めた江口隆哉は、その帰朝公演（1934年）では評判が良かったが、海外での上演の際は酷評されている。理由は、日本的なものを感じさせない演目だったから、である。

東洋人が海外でパフォーマンスをする際に求められている事は、それが同じ東洋であっても、また現代においても、「外国人」という視点で見た限り、そして、「外国人」として演じる限り、変わらないのかもしれない。

なお、会場からは本来の伝統舞踊が観たい、という意見も出た。シンポジウムや閉会式で見せてくれた、韓国未来舞踊学会会長らのちょっとしたパフォーマンスは圧倒的な存在感を示すものであり、年齢を重ねた演者の魅力が伝わるのも古典の良さであろう。そういった面では、伝統から現代というテーマで行われた日本側パフォーマンスのプログラムは評価されるものだろう。

(稲毛博美)



Nam Jin-Hee 現代舞踊団



Song Soo-Nam 舞踊団